

# なぜ錦楽寺は廃れ、吉備彦神社は存続したのか

## 「錦」の意味するところ

金楽寺の地名は、「真備が唐土を錦の袋に入れて持ち帰り、錦楽寺を建立した」旨に由来することは、前号で述べたとおりですが、その拠所は『大日本地誌大系 25巻』に訳本収録されている『撰陽群談』によるものです。(写真：線①) 原文では「彼地の埴土を取て錦の袋に入れ帰朝す。其土を設て是に置き、因て錦楽の號ありと云えり」とあります。錦とは、様々な色糸を用いて織り出された貴重な絹織物のことです。例えば「錦を飾る」とは、功を成し遂げて故郷に帰ることを意味します。当時の錦は、極めて高価で価値あるものでした。真備は唐土をわざわざ錦の袋に入れ、万感の想いをこめて大切に持ち帰ったのでしょう。唐土を入れた錦の袋…錦楽寺の地名は、このように真備の特別な想いに関わったものです。錦楽寺跡、吉備彦神社には唐土を埋めたとされる空井戸があり、真備の想いが伝わってくるようです。

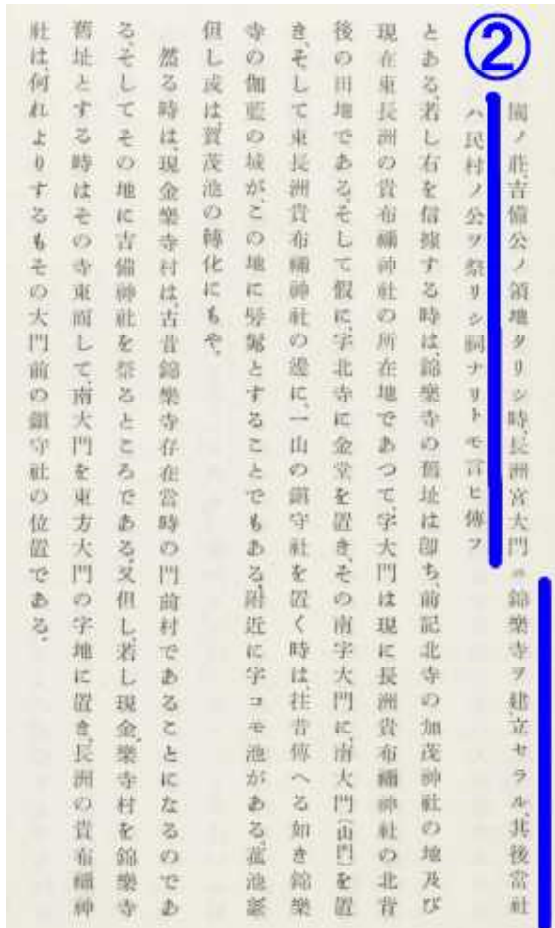
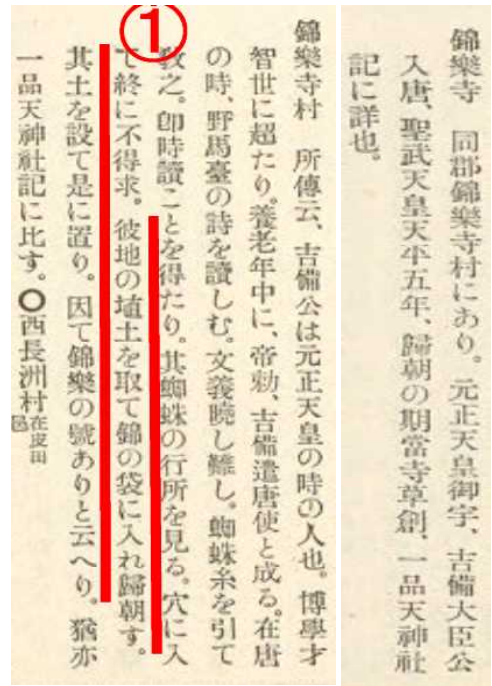


吉備真備

『撰陽群談』活字訳本 →

尼崎志 第2編 P376-377(1935年発行)

線②は『撰陽群談』転載—『小田村のしるべ』転載—『尼崎志』



## 民の力

さて、なぜ錦楽寺は廃れ、吉備彦神社は存続したのでしょうか。真備はやがて大納言や右大臣まで上り詰めたぐらいですから、相当の政治力あったものと思われます。帰国後の寺の建立の計画や資金調達も順調にできたのでしょう。しかし、建立された当時は栄華を誇っても、真備が亡くなって時が移りゆくにつれ、寺の担い手もいなくなり、やがて廃寺となったと考えられます。

一方、吉備彦神社はどうでしょうか。『摂陽群談』によれば「錦楽寺ヲ建立セラル、其後當社は民村ノ公を祭りシ祠ナリトモ云ヒ傳フ」（写真：線②）とあります。錦楽寺が建立されたのち、その敷地に村人によって小さな祠が建てられました。寺の敷地に祠（神社）？と思うかも知れませんが、寺と神社の隣在は神仏習合（神仏混淆）と呼ばれ、割とよく見かけます。

神々の信仰は本来土着の素朴な信仰であり、共同体の安寧を祈るものです。神は特定のウジ（氏）やムラ（村）と結びついて、その信仰は極めて閉鎖的なものでした。地域の信仰、鎮守として、代々地域の人々の手によって祀られてきたのでしょう。そして、信仰の場であるだけでなく、祭礼など村の祭りの場であったり、人々の憩いの場、子どもたちの遊び場としても発展し、根付いていったと予想されます。それとともに、最初は小さな祠だったものが、村の発展とともに建物もだんだんと立派になり江戸時代には今のような吉備彦神社の形になったと考えます。錦楽寺＝時の権力者による官営、吉備彦神社＝村の人々による民営…この違いが存続の明暗を分けたと察します。

なお吉備彦神社は、江戸時代以前は単に「天神社」（または小字を付けて一品天神社）と呼ばれ、祭神は吉備大臣（吉備真備）としていました。社名が現在と同じ「吉備彦神社」と記されるようになるのは、文献としては『明治12年調神社明細帳』以降で、祭神も「吉備大神」と称する「真備の霊」に変わっています。

## 一つの字から 広がる 深まる

「錦」という一文字に着目することで、真備の想い、ひいては「錦楽寺（金楽寺）」という地名に対する私たちの思いもまた、随分と違ってきます。史実をもとに何を感じ、何をイメージするか…学習とは、知識や体験に基づいて推理や探究・思考を重ね、検討検証していく活動とも言えます。読解力とは、単に読んで理解するだけでなく、行間を読み取り作者の想いや背景を解する力です。何度も探りながら読み返すこと、一文字をすくい上げることで、解釈もより深くなっていくでしょう。



受け継がれる民の力 信仰心